

記念日のいわれ No.7

10月12日…ノッサ セニョーラ アパレシーダ (Nossa Senhora Aparecida)

10月12日は「アパレシーダ」という祝日です。ブラジルの人たちが驚いたときに「ノッサ！」とか「ノッサ セニョーラ！」というのは、実はここからきています。1980年10月12日に故ローマ法王ヨハネ・パウロ・二世（ブラジルでは João Paulo II）がブラジルを訪れたのを記念して国定祝日として制定されたのですが、この祝日には、次のようないわれがあります。

サンパウロからリオ・デ・ジャネイロに向かってDUTRA街道を車で約170km走ったところに人口3万人ほどの小さな町、アパレシーダ市（Aparecida）があります。1717年の10月半ば、サンパウロとミナスの州知事がこのあたりを訪問するというので、魚を献上するよう命令がでました。そこで、アパレシーダ市を流れるパラíba川岸（Rio Paraíba）に住む3人の漁師、ドミンゴス・M・ガルシア（Domingos M.Garcia）、フェリッペ・ペドロソ（Filipe Pedroso）、ジョアン・アルベス（João Alves）が漁を始めたのですが、獲物はなかなか獲れません。ところが、しばらくして褐色の女神像の胴体部分が、続いて頭部が投網にかかり、それからは魚が次々と獲れるようになりました。3人はこの像を持ち帰って祀ったところ、これ以降、豊漁が続き、その他にも多くの奇跡が起きました。これを伝え聞いて全国各地より人々が参拝するようになったのです。

1745年には、小御堂（Basilica Velha：右側画像）が建立され、19世紀には王女イザベルが参拝するほど有名な寺院となり、1930年にはピオ六世（Pio VI）によって、この褐色の女神像「ノッサ・セニョーラ・アパレシーダ」はブラジルの守護神として指定されました。

続いて、1939年に高さ72mのドームと、100mの鐘楼を持つ広大な寺院（Basilica Nova：下の左画像）が旧寺院のすぐそばに建立され、「ノッサ・セニョーラ・アパレシーダ」の像もこちらに移されました。総建物面積1万8千㎡で3万2千人を収容することができ、ブラジルで最も有名な寺院の一つとなっています。現在は、1年で約1200万人が参拝しに来ています（エッフェル塔は600万人、スカイツリーは619万人）。



奇跡を呼び、幸運をもたらす“褐色の聖母”は、庶民の信仰を集め、年中参拝客で賑わっていますが、10月12日のこの日は特に多くの人々がブラジル各地よりバスを連ねて参拝し、その数は20万人ともいわれています。そのため、寺院の敷地内には広大な駐車場も完備され、この2つの寺院の間には、立派な歩道橋がつけられていて、簡単に徒歩で行き来することができます。

ちなみに、10月12日はもともとブラジルの「子どもの日（Dia da Criança）」になっています。アパレシーダの祝日と「子どもの日」が重なりました。

また、1492年にイタリア人“クリストファー・コロンブス（Christopher Columbus）”がアメリカ大陸を発見した日として、アメリカ発見記念日（Descobrimento da America）という国定祝日に指定されていた時期もあったようです。